今後の課題と展望

調査結果から、回答のあったうち6割に近い学校が「馬の特性を活用した指導」を知っていることがわかった。さらに、何らかに馬との触れ合いの機会を設けている学校が4校に1校を越えていることもわかった。これらの結果は、私たちの予想を大きく越えたものであった。しかし、馬と触れ合ったり、馬に乗るという機会がどのような教育的な意味をもつのか、指導に活かしているのかといった点については、多くの場合必ずしも充分な検討がなされていないことが推察された。他方では、週1回の実施によって成果を挙げている学校も見られた。

また、調査から6割を越える盲・聾・養護学校が動物との触れ合いを何らかの形態で教育活動に組み入れていることが分かった。児童生徒の健康面の理由から実施が困難な病弱養護学校を除くと、実施率は7割を越える。しかし、動物との触れ合いが子どもたちにとって大きな意義があるとしながらも、必ずしもその活動方法や評価法が確立された上での実施になっていないことがうかがわれた。この点は今後の大きな課題であると思われる。

本研究を通じて、馬を用いた障害のある子どもに対する指導は、次の三つの側面から捉えられることがわかった。

(1) 乗馬に伴う身体運動を活用した身体操作に関する学習の側面。

(2) 馬という人に親和性が高く、乗るというかたちで心身を任せる機会を提供できるという特徴を持つ動物を媒介とした対人関係や社会的なスキルの学習という側面。

(3) 広く馬のいる環境の多様性を様々な学習素材として扱うという側面。

これらの実際的な方法や留意点については本報告書に示した通りである。しかし、その活動方法や評価の観点及びこれに基づく評価方法の開発が課題として残された。

最後に、「馬を用いた障害のある子どもの教育」について今後の展望を考えてみる。諸外国においてこの領域はプール指導や音楽療法と並んで障害のある子どもの教育の分野に定着している。しかし、今なお馬が文化的に一般的な身近なものとして存在しているドイツやイギリスなどのヨーロッパと異なり、日本においてこの領域が発展していくためには、障害のある子どもの教育に関する専門家、馬の調教の専門家、獣医師、厩舎作業指導者、馬事関係者などによるチームアプローチの行われることが最も実際的と言える。その積み重ねの中で指導及び理論の体系化が図られていくことが必要である。